

大阪産業大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）  
2025（令和7）年度 自己点検・評価報告書

プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）
内部質保証推進委員会 数理・データサイエンス・AI教育推進部会

点検・評価項目		自己評価	点検・評価結果	指標・根拠等	点検・評価結果を踏まえた改善の方向性・取組等
学内からの視点	1	A	履修登録者は、前期164名、後期210名となった。そのうち修得者は、前期143名、後期153名となった。	履修・成績情報	今年度は通常の履修登録方法で受け付けたことにより、昨年度を大幅に上回る履修登録者数となった。今後もチラシ配布などを通じて、積極的な履修を促していく。
	2	B	授業終了後アンケートでは、4つの項目を設定し、学修成果を評価した。概して高い学修成果を示しているが、すべての項目で前期より後期の方が高い値となっている。また、3「データの適切な収集および基礎的な分析・表現について理解し、数学的・統計学的に正しく取り扱える」については前期・後期とも比較的低い値となっている。	授業終了後アンケート 問1～4	前期に比べて後期の方が学修成果が高い傾向にあり、授業担当教員が学生の反応や理解度を踏まえて授業運営を工夫したことがその要因と考えられる。学修成果が比較的低い項目については、授業運営の改善によって向上を図る。また、必要に応じてシラバス内容の見直しも検討する。
	3	B	授業終了後アンケートでは、理解度60%以上と回答した学生は8割前後となっており、授業の目的は達している。	授業終了後アンケート 問5	理解度60%というのは、謙遜を含めた数値であると思われるが、理解度80%以上と自信をもって回答した学生が前期で約3割、後期で約4割にとどまっており、この引き上げをしたい。また、各クラスを受講者数についても、学生の理解度に重点を置いた、適正人数となるように調整していきたい。
	4	A	授業終了後アンケートでは、「他の学生や後輩への推奨度」について80%以上と回答した学生が約7割に達し、高い推奨度が示された。	授業終了後アンケート 問6	今後も高い推奨度を維持したい。
	5	A	通常履修登録方法による受付に加え、新入生へのチラシ配布を行った結果、前期164名、後期210名が履修登録を行った。	履修・成績情報	今年度は、通常の履修登録方法により年間200名程度の履修登録が期待できる見込みであった。結果としてはそれを大きく上回る履修となり、履修登録者数の問題は改善されたが、履修希望者数は約830名だった為、多くの学生が履修できない状況となった。次年度は4クラスから9クラスに増設しこの問題を解消する予定である。また今後も、新入生や新編入生へのチラシ配布により履修を促していく。
学外からの視点	6	—	2024年度より導入したプログラムであるため、評価が行える段階に至っていない。		評価方法の整備に向けて検討を進める。
	7	B	プログラムを構成する科目である「データサイエンスの基礎」の受講希望者は、前期約450名、後期約380名であるのに対し、履修登録者はそれより200～300名程度少ない。これは、施設や教員の確保が難しいことが主な要因であり、オンデマンド授業の活用を検討する必要がある。生成AIについては、本プログラムに限らず、より広範な教育プログラムに組み込む形でカリキュラムを変革していくことも検討すべきである。さらに、本プログラムの意義を企業等へ発信することで、産業界との連携強化や学生のキャリア形成にもつながる。	外部評価報告書	他大学での取り組み事例を参考にしつつ、学生が社会に関心を向け自律的に学習することを促すため、オンデマンド教材の導入を検討する。また、本プログラムの意義や特長をこれまで以上に学内外へ発信するための方策についても検討を進める。
	8	A	授業終了後アンケートでは、「学びへの興味・関心が高まった」と回答した学生は、前期・後期ともに約8割に上った。また、「今後も学んでいきたい」と回答した学生も前期が約8割、後期が約7割であった。なお、否定的な回答はいずれも1割未満にとどまっている。	授業終了後アンケート 問7～8	社会の進歩や時事的な内容を授業で取り上げるなど、本学の学生にとってより適切で魅力ある内容となるよう工夫しながら授業を展開していく。具体的には、最新のAIなどに関する情報を内容を盛り込み、学生が自ら情報収集やPC作業など、実践的に学べる時間を増やしていく。
	9	A	授業終了後アンケートでは、「分かりやすい授業であった」と回答した学生は前期で約7割、後期で約8割に上った。	授業終了後アンケート 問9	予備知識やスキルの異なる幅広い学生層に対応できるよう細かな工夫を重ね、それらを適宜アップデートしながら、学生にとって分かりやすい授業を展開していく。

【自己評価】 A：高いレベルの取り組みであり、ほとんど改善の必要がない。 B：標準的なレベルの取り組みであり、大幅な改善の必要がない。 C：改善の必要がある。

※自己評価「—」：本プログラムは2024(令和6)年度に初めて実施したことから、プログラム実施後の評価を要する項目に対し、十分な評価が行える段階に至っていないと捉え、「—」と表記しています。